



スペインからのよだれかけ
 新年の始めに②

写真右のプーさんの。左のミッキーマウス人形は、息子の結婚披露の人形は、その息子に露宴の最後に両親へと昨年待望の赤ちゃんがプレゼントとされたも産まれた時にもうたも



赤ちゃんの重さの人形

のだ。

二つとも息子や孫が産まれた時の体重と同じ重さになっている。人形は今、私たちの寝室にあり、朝晩あいさつを交わす。離れて住んでいても人形が息子や孫を思い出させてくれ、有り難い。

さて、プーさんの人形は、息子の結婚披露の人形は、その息子に露宴の最後に両親へと昨年待望の赤ちゃんがプレゼントとされたも産まれた時にもうたも

送るためだ よだれかけを

送ってくれたシスター



二〇〇六年にスペインを旅した時、修道院を訪ねた。面会室は格子で

本人シスターから贈られて来たものだ。このシスターについては六十二回と四百七十七回に紹介したので関心のある方はホームページを見てほしい。

遮られ、下の写真はカメラを格子の向こうに入れて撮ったものだ。祈りと労働の戒律の厳しい観想生活の中で、わざわざ同僚のシスターによだれかけを作っても

これらスペインをはじめ世界各地にあるカルメル会共通である。よだれかけはそのわずかな自由時間を利用して作られたのだ。神を賛美する人は人を愛し、厳しい戒律の中でも人との交わりを大切にされるのだ。

シスターは以前、山口市仁保のカルメル会におられ、その後、スペインのカルメル会に移籍された。理由はサビエルらの宣教師と同じように自分も祖国を離れ、宣教師と同じ体験をしながら観想生活を

自分はいろんなものを金額によって価値判断する傾向がある。しかし今回送られてきた神への奉獻に生涯を捧げ、結婚せず修道院という囲いの中で祈りと労働の日々を過ごすカメルリット。その生活は一日七回、全員で「教会の祈り」を唱え、朝夕各一時間、念祷（ねんとく）という口には出

現代社会は人間関係が希薄になり、人との交わりを大切にしたいように思える。無為にテレビを見て、本質的には孤独。高齢化社会はその傾向がさらに強くなる。人の幸せは真心のある交わりの中にある。よだれかけはそのことを私に教えてくれた。

心は痛感した。机の上の「マザー・テレサの言葉」の目録に、ちょうど「大切なのは、どれだけの愛をその行いに込めるか」とある。

その通りだ。まだ会ったことある。

その通りだ。まだ会ったことある。